

十三、四世紀の英國立憲史、それはとりもなほさず英國議會の誕生、發展史と云ひ得る。

封建的大諸侯の抑壓に成功したノルマン王朝に續いて起つたプランタジネット王朝(1154-1399)、この諸王が把持し來つた強固な君主權の諮問機關として、王の補佐に當つた Council と、かゝる王權偏重に抗して、市民の權益擁護、宮廷貴族の二枚舌使用防禦の爲(39)構成された Parliament、との構成要素、及びその機能とを比較検討し、中世國家の法的活動内に於て Parliament が獲得した新なる意義を鮮明ならしめんと努めた著者 B. Wilkinson は第一章 Plenum Parliament and the Council in Parliament 第二章 The Nature of Parliament に於て、當時の諸文書を辿つて充分その實を果してゐる。而して、かゝる初期議會の性質を、尙ほ傳統的な王の universitas regni なる理念に依つて覆はれた curia regis の延長と見なされた當初に於ては、王は council からのみ advice を期待し、Parliament に於ては、國民をして王の行爲に無條件に同意、納得せしめんとする council 中心主義が依然持續せられたのであつた。

かゝる中世的な傾向は tut le commun de la terre の代表として議會に参加した Baron の勢力が、當時強盛に向ひつゝあつた市民を背景として議會の法的活動範圍擴大を企圖し始むるに及び、議會は民衆の請願受付、司法權の獲得、行政方面への進出と積極的に王權抑壓、民權尊重の互歩を踏み出し始めた。第三章 The Beginning of Parliamentary Control over the Custom on Wool に

於て、著者はかゝる議會勢力伸長の跡を、當時最大關心事たる關稅附課權問題を中心に説き明し、一二七五年の Magna et Antiqua Custuma と一二九七年の Confirmatio Cartarum の間に存する王權退却の歴史を意義付けてゐるのである。

以上の如き経緯を議會成立の裡に明らかならしむる事に依つて、吾々は英國議會制度の特質が奈邊にあるかを察知し、かゝる英國議會が近世に於て果した大きな役割の淵源が遠く十三、四世紀の市民の動きに胚胎してゐた事を知るに本書は恰好の良書となる。(定價二・二五) (小澤)

哲學的地理學(Philosophische Erdkunde)

ペーター・ハインリヒ・シュミット

從來既に『經濟學研究と地理學』、『經濟地理學概論』、『交通經濟の地理學的基礎』等の特色ある著書によつて經濟地理學界に極めてユニークな地位を占めてゐたシュミットは昨年標題の如き新著を公にして彼の思想を更に一步前進せしめた。元來歴史學及び地理學に於ける事象の形而上學的把握は近年の一般的傾向とも思はれ、我が國に於ても高坂正顯氏の『歴史的世界』や、和辻哲郎氏の『風土』などはその一例と考へられるのであるが、シュミットの此の著書も正しくかゝる傾向の一つのあらはれであり、極めて示唆に富んだ著作である。その副題にも『地理學に於ける思惟の世界とその國民的問題』とあつて、從來の彼の活動舞臺たる比較的局限られた經濟地理學の領域から飛躍した、ある意味では極めて大

瞻なる地理的世界の全貌の展開でもある。

彼によれば凡そ現象の空間的關係の研究に際して地理學ほど豊富な事實に恵まれたるものではなく、而もその範圍が自然現象から始まつて歴史、經濟、政治、文化等の諸人文現象に至るまで多種多様のものに接觸してゐる學問はない。故に苟も地理學者にして自己の研究成果を一層廣く把握せんとするならば、此の多様な接觸面を利用してまづ地理學を此等近接學問の思惟と結合せしむべきであり、かくして哲學なるもの、中に最後の結論を求むべきであるとするのである。『かくて地理學は哲學に於て自己の充満を見出し、又學問の女王たる哲學は地理學に於て價値高き協力者を見出すであらう。』(Dilthey, S. 7) 環境は思考によつてのみ吾人の内部に於て更新せられ得る。(Ibid. S. 5) かゝる立場により、シュミットの例の如き東西古今の該博なる文獻の縦横の驅使を特色とする獨創的な世界が吾人の眼前に展開されるのである。

本書の内容は五部に分れて居る。第一部『構成』(Gesaltung)に於ては地球と世界空間、地殻、水の被覆、及び氣圏の四章に分ちまづかゝる自然の構成要素を背景に置いてその哲學的、精神的意義の説明を爲してゐる。例へばあらゆる空間的なものを「運動」の相に於て把握し、「無休息」と「均衡」を以て自然の本質なりとし、或は一切の動く水の中に現れたる音響の世界の成立を論じ、またかのバツコーフェンの神話の中にあらゆる發展形態の源を求むる説に養成して自然現象がいかに各民族の神話と宗教とに、最初の反映をなせるかを見てゐる。次に第二部『生命』(Leben)に於ては、

生命の地上に於ける歴史、環境、生命の擴充、生體としての地球等の章に分つて地上の自然により養はるゝ生命の意義を論じ、又生命が各々自己の空間を主張して至る處で地空間をその争闘場たらしめる経路を述べ、或は地上の生命の生死を論じて動植物より岩石に至るまで一切の自然物の死は結局、より新らしき生命を生む爲の現象に外ならないと言つてゐる。

第三部の『精神』(Geist)以下に論ずるところは全く形而上的なものを背景に置いてそれと地上の空間、自然との關聯を説くといふ立場をとつてゐる。寧ろ本書のエッセンスは此等の部分にあるやうに思はれる。即ち『精神』の部に於てはまづ意識と環境の問題をとりあげてノヴァーリスの『吾人の思惟は宇宙の活動的な要素』てふ立場より兩者の密接な關聯を求め、進んで民族の精神發展に影響せし場所的條件を述べ、民謡、傳説、童話、詩等の藝術や言語がいかに各地方の場所的條件の產物なるかを豊富な實例を以て擧げ、結局地理學者は同時に藝術家として此等の内部的關係を摘出し得る能力を持たねばならぬといふ。此の點は全くかくエヴァルト・パンゼの思想と同一のものを示して居る。更に道德觀念の地理的相違を論じて既に早くカントが『道德地理』(moralische Geographie)なる言葉を唱へて此の點に着目せる慧眼を賞讃し、又同様な立場でブルックハルトの『世界史觀』中に述べられたる民族學を基礎としての『精神地方地圖』(Geisteslandkarte)の主張を引用してこゝに一つの研究目標を置くべしと爲してゐる。

第四部は『美』(Schönheit)である。『地球の美はその價値ある本

來の特質である。その美の認識こそ地球の最も價値ある認識である』(S. 18)。こゝに於ては地上の各風景要素を分析して美しき表現が與へられてゐる。山岳、平原、海洋、植物界等の自然美の指摘もさることながら、特にこゝでは自然の光と影、色彩、香及び音響の世界に如何なる美感を置いてゐるかを強調したい。殊に風景に於ける香の要素に着目したことは注意すべき點と思はれる。或は藝術家の自然感の史的變遷、多くの自然藝術家の作品等について詳細に論じてゐる。

第五部は『心』(S. 114)である。こゝに於ては『吾人は地球を、眞實に、合目的に且つ美しく認識し、またそれから一層高き富を求むるが爲に、知識と藝術心とを以て之を見なければならぬ』といふ立場の下に、地上に於ける人間の結局の目的を論じ、且つ本書の副題に示した『國民的問題』とも關聯せしめてゐる。例へば古來多くのそれ／＼の地方の神學者により如何に異なる人生觀が地上に分布せしめられて來たかを述べ、進んで各民族はその空間と土地とに十分なる調和を保つべきであり、こゝに於て『祖國』の概念は重要な意義を有して來ると爲してゐる。この點はまたかのバンゼが自己の『構成地理學』から發して結局『祖國愛』にまで到達した經路と同一のものを示してゐる。蓋しこれが近年のドイツ地理學界の一傾向とも見られるのである。

以上が本書の内容であるが、本書を通讀して得た感じは、嘗て安倍能成氏であつたかと記憶してゐるが帝國大學新聞紙上で和辻

氏の『風土』を批評して『その豊富なる思索と多岐なる考察に辭はされた如き思ひがした』と述べられたものと全く同一である。單なる形而下的な現實的事實の羅列のみに慣れ、それを地理學とのみ考へて來た人があれば本書の内容は驚嘆に値するであらう。而してシュミット特有の立場、即ち『現象の空間的分布』と『場所的結合』の概念を以て地理學構成の基礎となすことは、本書を通じて亦一貫して示されてゐる。但し吾人も屢々指摘した如く、現象の單なる空間性のみを以て地理學的概念とするならば、現象にして空間的に存在せざるものはなきが故に、餘りに地理學の内容を多岐ならしむる處はなしとしない。此の點にやゝ考ふべき處があると思はれるが、兎も角彼獨自の概念の上に立つて先人未踏の領域に足を踏み入れ、これだけの系統化を爲し得た努力は賞讃に値しよう。換言すれば吾人がその中から拾ひ出して以て思考を發展せしむべき幾多の材料庫たる價値は絶大である。(ストウツトガルト・フェルティナンドエンケ發行、一九三七年、時價五・〇〇)〔別技〕

氣候學

福井英一郎著

本書の體裁は、紺クロース菊版、五六六頁で岡田武松著氣象學改稿第二版に似てゐる。内容は順に、中央氣象臺長岡田武松氏の推賞の序、次に著作の經過、方針を闡明せる著者の自序、それから序論と五篇二十五章の本文、續いて附録として數理解説、氣候